

特集：日豪交換研修2008 報告

YPEP2008 日豪交換研修に参加して

株式会社建設技術研究所 道路・交通部 技師
YPEP2008 研修生 甲斐慎一郎

1. はじめに

私の研修先は、GHDという会社のニューカッスル(Newcastle)オフィスです(図1)。GHDはオーストラリアを本拠地とする国際的なコンサルタント会社で、アメリカ、中東、ヨーロッパ各国などにも支社を持つ大きな企業です。

ニューカッスルは、シドニーの北東約150kmに位置する街で、内陸部の石炭を輸出する港町として栄えています(図2)。ニューサウスウェールズ(NSW)州でシドニーに次いで2番目に大きな街ですが、街自体は地方都市の雰囲気が漂っています。

現在、港付近で市街地再開発が行われており、GHDのオフィスも来年1月に再開発地区に移転する予定です。

GHDニューカッスルオフィスでの交換研修生の受け入れは初めてだったこともあり、事前研修でのやりとりでは、担当者もどのように対応してよいのかわからず、困惑した様子でした。

2. 訪問研修内容

シドニーでの各者顔合わせを終え、10/8(水)よりGHDでの約3週間の研修が始まりました。私は、日本での専門分野と同じ、道路計画・設計を行っているグループで研修を行うことになりました。

私のお世話係はダニエル(Daniel O'shaunessy)さん(図3)。彼は、地元ニューカッスル大学を卒業し、GHDの社員になって4年目の方です。大学卒業前の1年間は、この会社でアルバイトをしながら大学に通っていたそうです。

研修初日には、GHD社員の一員として、保健、安全管理についての講習を受けました。また、オーストラリアと他の国での仕事上の文化の違いに関する講習も行われ、私たち研修生はテキストの例題に基づき文化の違いについて理解を深めました。



図1 GHDニューカッスルオフィス

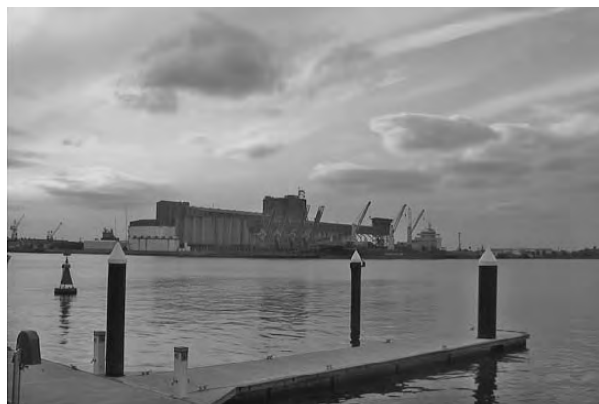


図2 ニューカッスル港



図3 ダニエルさん

研修を行うことになったグループでは、ミニバー(Minimbar)プロジェクトというのが、完成間近となっていました。

このプロジェクトは、内陸部の石炭を運ぶための鉄道が谷を通っている区間について、盛土によって谷を回避する別線を1線増線し、貨物列車の輸送力増強を図るというものです(図4)。

このプロジェクトの中で、私は、工事中スペース捻出のために周辺道路の追越車線を閉鎖した場合、交通にどのような影響が出るかを検討しました。

検討にあたってオーストラリアの道路の設計基準を参照しましたが、左側通行でメートル単位の国ということもあり、日本の基準との比較が直感的に行えました。

日本だと、基準を元に判定可能な数値を示さないと根拠にならないような雰囲気がありますが、こちらの感覚では、「基準は基準だからね」と、おおよその傾向が予想できる内容であれば問題ないそうです。

GHDの勤務時間は8:30～17:00で、途中1時間の昼休みを挟みますが、各自作業状況に応じてフレキシブルに勤務しているようです。

業務実施体制は、1つのプロジェクトについてリーダーが部下に作業内容を割り当て、部下は与えられた作業に専念する形となっています。

なお、プロジェクト完成間近でも、2～3時間程度の残業で対応していたようでした。

研修期間中には「ノー・マイカー・デー」なるものが開かれ、マイカーを使わないで仕事に来た社員には、ポール部長より朝食が振舞われるというイベントもありました(図5)。

3. 豪州での生活

今回の交換研修より、ホームステイでは無くホテル生活となりましたが、宿泊費及び生活費が思いの外高かったです。日本のようにコンビニで様々な軽食が売られている訳では無いので、電子レンジも無いホテルでは、普段の夕食をどのように済ませるか悩みました。また、ニューカッスルが地方都市ということもあり、自動車や自転車無しで生活するには少々不便でした。

週末は、ダニエルさんにニューカッスル近くのネルソン・ベイ(Nelson Bay)というところの砂丘に連れて行ってもらい、砂の上を4輪オフロードバイクで駆け巡るツアーに参加しました。

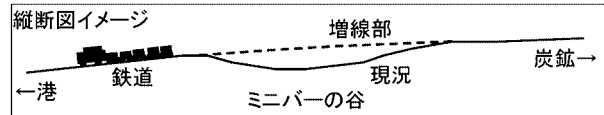


図4 ミニバープロジェクト概要



図5 ノーマイカーデーの様子
(左はフライパンを持つポール部長)



図6 ティン・シティ



図7 ダニエルさん宅での夕食

コースに至るまで、鳥取砂丘の10倍はあろうかというくらいの広大な砂漠の中をオフロード車で進むのですが、その途中にティン・シティ(Tin City：ブリキの街)という集落があり、今でも人が生活しているそうです(図6)。

4. 終わりに

今回の研修は、仕事に関わるものでの初めての海外滞在でした。勉強や旅行で行く海外とは違い、異国の全体的な文化の違いだけでなく、仕事のスタイルや専門分野の技術基準に関する違いも知ることができました。

今回の研修で一番印象に残ったことは、オーストラリアでは行政とコンサルタントがお互いに建設的な提案を行い、自分の立場だけではなくプロジェクト自体が最も良くなる提案を行えるような雰囲気があったことです。

別のプロジェクトの打ち合わせに同行した際、他の社員の方とそのような話をしましたが、「発注者は自分のところの施設が良くなるような提案をしてくれることが嬉し

いんだよ。」と言われていたのが印象的でした。

オーストラリアの国民性がそうさせるのか、広大な土地があるから用地買収等の問題が少ないのか、はたまた設計技術者を含めて「自己責任」が徹底しているからなのか…よくわかりませんが、現在の日本の厳しい環境に比べると理想的な環境で仕事が行えているように感じました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただいたAJCE、ACEA各協会の皆様、研修先であるGHDニューカッスルオフィスの方々、ならびに本研修に参加させていただいた株式会社建設技術研究所の皆様、に厚く御礼を申し上げます。

特集：日豪交換研修2008 報告

YPEP2008に参加して

株式会社長谷川 構造事業本部 札幌技術部 主査
YPEP2008 研修生 長谷川 正

1. 研修概要

2008年10月7日から24日までの約3週間、研修生としてYPEP2008に参加しました。YPEPは、日豪の若手技術者が1年おきに相手国企業を訪問し、ワークスタイル、生活習慣などの違いを体感するとともに、両国の若手技術者間の連携を深めることを目的としています。今年、各地から6名の技術者が渡豪しました。

2. 事前研修

訪問研修をスムーズに進めることを目的として、事前研修としてホストカンパニーの担当者とE-mailを用いた事前研修を実施しました。7月に自己紹介メールを送ることから始まったのですが、ホストカンパニーの担当者が長期休暇に入ってしまったこともあり、渡豪直前に慌しく連絡を取り合う形となってしまいました。日本でやっている業務内容の紹介として耐震関係の資料をいくつか送ったのですが、地震による橋梁の被災写真は、かなり興味を持ってもらったようでした。

3. Newcastleについて

研修先のNewcastleは、Sydneyから北に車で2時間程度に位置する、オーストラリアで2番目に歴史のある都市です。事前研修で送ってもらった資料や、Australiaで6番目に大きな都市ということから、都会的なイメージを持っていたのですが、美しいビーチと歴史的な建物が多く見られる、良い意味で田舎的な、美しく、過ごし



Newcastleの街並

やすい街でした。

昨年の夏に大規模な水害に襲われ、町中が水浸しになったそうです。また、このとき日本国籍のタンカーが Newcastle のビーチで座礁したそうです。現在は、港周辺の再開発が進んでおり、数年後には更に美しい町並みになると思われます。

4. GHD(ホストカンパニー)について

ホストカンパニーとなる GHD は、全世界で 7,000 人程度の従業員を有する非常に大きな企業であり、Newcastle のオフィスでも約 160 人が働いていました。

事業内容は、構造物設計、設備設計、道路設計、環境、国防関係など多岐にわたる総合的なコンサルティング企業です。

日本との違いを感じたのは女性技術者が多いことで、Newcastle のオフィスでは技術者の 25% を占めているそうです。これは、日豪のワークスタイルの違い(勤務時間等)が大きく影響していると考えられます。

また、オフィス内は非常にゆったりとしたスペースが確保されており、うらやましく感じました。



GHD のオフィス

5. 交換研修

GHD の勤務時間は 8:30 ~ 17:00 までで、途中 1 時間の昼休み(各自自由な時間にとることができる)があります。日本のように遅くまでの残業や休日出勤はほとんど無いようですが、朝は 8:00 には多くの技術者がすでに仕事をしており、勤務終了時間までの時間管理がしっかりしているのが特徴的だと感じました。



昼食会の様子

日本と比較して、1つのプロジェクト規模が大きく、また、1つのプロジェクト内に様々な分野を含んでいる(道路設計、橋梁設計、電気設備設計、調査、など)ことが特徴です。

2週目の週末には、あるプロジェクトの区切りがついたということで、昼食会が開催され、私も参加させていただきました。昼食会に参加した人数からも、多くの技術者が1つのプロジェクトに参加しているのだと感じました。

私の専門は、橋梁の下部工および耐震設計であるため、オーストラリアの設計基準を見せていただき、日豪の設計基準の違いに関するレポートを作成しました。また、オーストラリアの設計プログラムを使った簡単な計算も体験することができました。

橋梁設計の基本的な考え方は似ているのですが、耐震設計で考慮する地震動の大きさが唯一の大きな違いで、オーストラリアでは大きな地震が発生していないため、非常に小さな値となっています。

反対に、GHD の技術者は日本の設計地震力の大きさに驚いていました。

6. オーストラリアでの生活

3週間の研修期間の中で多くの人々に会いましたが、皆非常にフレンドリーで、とても快適に生活させてもらいました。浴衣姿で街に出たときには、本当に多くの人達に声をかけてもらえました。

オーストラリアは様々な国からの移民を受け入れているせいか、日本のものを含むアジアの食材は普通に手に入ります。

宿泊先がキッチン完備のアpartメントだったので、カ



浴衣姿で

レーライス、そば、うどん等の日本食を作ったりもしました。もちろん、オーストラリアの食事も美味しかったです。

週末には、大砂丘で有名な Stockton Beach (いろいろな映画撮影に使われたようです) で4WDドライブを体験したり、レンタカーで、ワイナリーで有名な Hunter Valley までドライブしたりしました。オーストラリアは日本と同じく左側通行で、日本車もたくさん走っているので、あまり違和感はありませんでした。

オーストラリア独特の道路構造は、ランナバウトと呼ば



4WD ドライブ (Stockton Beach)

れる信号の無いロータリーで、ランナバウトに入る車より出る車を優先することでスムーズな交通が確保されていることに関心しました。

7. 謝辞

YPEPの研修を通して、お世話になったホストカンパニーであるGHDの皆さん、ACEAおよびAJECの皆さん、また、快く海外へ送り出してくれた長大札幌支社の皆さんに心から感謝します。

特集：日豪交換研修2008 報告

日豪交換研修プログラムに参加して

株式会社建設技術研究所 水システム部
YPEP2008 研修生 矢神卓也

1. 概要

2008年度の日豪交換研修プログラムの研修生として、10月6日～26日の3週間に渡ってARUP社のブリスベンオフィスに滞在する機会を得た。本研修においては、現地に訪問する前に事前研修として、研修先担当者との間で、日本とオーストラリアの水問題等についてのやりとりを行った上で、スムーズな訪問研修入りに備えた。以下に、日豪交換研修の報告を行う。

2. 事前研修

訪問の約3ヶ月前より先方担当者、宿泊先の決定

や、訪問時に希望すること、日本の水問題等についてメールにてやりとりを行った。これにより、訪問研修にスムーズに入ることができたと思う。先方からは「日本におけるもっとも困難で重要な水問題について整理せよ」という課題が提示され、日本においても地球温暖化に伴って渇水、洪水のリスクが高まる可能性があること、それらは統合的水資源管理により解決策を模索していくことが求められていること等について整理した。

3. 訪問研修

○研修先企業

研修先の ARUP 社はロンドンに本社をもつ、総合エンジニアリング・コンサルティング会社で、世界 37 ヶ国の 90 を超える事務所で 10,000 人を超えるスタッフが働いている。私が訪問したブリスベンオフィスには、オーストラリア生まれの人だけではなく、イギリス、インド等、さまざまな国の出身者が働いている。

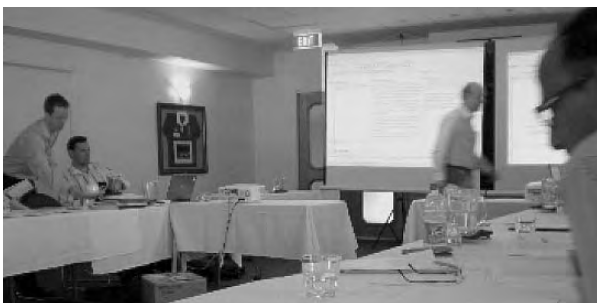
○テクニカルツアー

技術者継続教育の一環である、一泊二日の外部研修に参加した。研修は、ブリスベン近郊における海水淡水化プロジェクトと、下水再利用プロジェクトについての講義と現地見学である。ブリスベンを含めオーストラリア各地では一昨年度まで極度の渇水に見舞われており、そのため、水資源の有効活用に関するプロジェクトが目白押しとなっている。下水再利用プロジェクトは、世界の中でも非常に規模の大きいプロジェクトで、最終的には日量 23 万トンを上流のダム湖に送水するという驚くべき計画となっている。

印象的だったのは、研修中に「ネットワーキングタイム」という、技術者同士が交流を持つ時間が設定されており、この時間には、研修参加者同士が積極的に、情報交換を行っていたことである。オーストラリアにおいては、仕事を得るためにも、このような機会が非常に重要だとのことである。

○ミーティング

今回、研修先担当者に頼んで、発注者との打ち合わせにも参加させてもらった。発注者との関係は非常に良好で、ARUP 社と発注者が協同してプロジェクトを進めていた。打ち合わせの席で組織ごとに固まらず、席次がバラバラだったのも印象的である。また、日本では、発注者と飲食をともにすることは制限されていると言っ



たら驚かれた。

○技術者教育について

オーストラリアにも CPD プログラムがあるが、技術士は 3 年で 150 時間の継続教育が義務付けられている。また、CTI と同様、ARUP 社においても、OJT や、ソフトウェア講習、プレゼンテーション研修等が行われているが、PhD の取得は推奨されていないようである。また、世界各地にオフィスがあることから、積極的に海外支店への転勤、派遣が行われている。これにより、広範なネットワークを築いたり、技術者が世界の動向を知ったりすることができ、グローバルに仕事を取っていくために非常に有利であると思った。

○意見交換

研修中に、日本の河川の特徴についてプレゼンテーションを行い、また、ARUP 社からも河川関連のプロジェクトについて紹介を受け、意見交換を行った。

私の専門である河川計画分野に関しては、使用しているツールや、計画に用いる雨等について説明を受け、日本とオーストラリアの考え方の違いを知ることができた。



4. ワークライフバランス

○勤務時間について

基本的なオフィスタイムは 8:30 ~ 17:00 である。しかし、契約上は 1 週間で働く時間だけが決まっておき(例えば週 37.5 時間)、それさえ満たせば曜日ごとに働く時間を自分で設定できる。そのため、中には毎週水曜日と金曜日は 14 時に帰るといった人がいた。

また、オフィスは大体 18 時ころになるとほとんどの人は帰宅していたが、忙しい時期には家に仕事を持ち帰ったり、休日に出勤したりと、そのあたりは日本のコンサルと変わらない部分も垣間見えた。特に技術士に相当

する資格 (CPEng) を有している人は忙しそうであった。

○休暇制度について

20日間の有給休暇があり、すべて取得するように上司から指導される。また、ARUP社には社員が休暇を買う制度があり、給与を犠牲にする代わりにさらに10日分の休暇を取れる制度がある。それを利用して長期に海外旅行をする人も少なくない。

5. オーストラリアでの生活

私が滞在したブリスベンは大陸の東海岸に位置するオーストラリア第3の都市で、気候は一年中を通して、温暖かつ乾燥しており、非常に過ごしやすいところであった。世界有数のリゾートであるゴールドコーストまでは車で1時間ほどである。

今回の研修では、会社に徒歩5分ほどのところにあるアパートメントをもう1人の研修生とシェアした。ホームステイという形態をとらないことで、研修先もこちらもお互い気を使わずに済み、またスーパーで夕食の食材を買ったり等、現地で生活する感覚を味わうこともできた。

仕事帰りにARUP社の人たちとサッカーワールドカッ



プ予選を見に行ったり、休日には動物園等にも連れて行っていただいたりと、濃いオーストラリア生活を送ることができた。

6. 謝辞

本研修の参加にあたっては、AJCEを始めとして、ACEA、研修先のARUP社の皆様には大変お世話になりました。また、私を研修に快く送り出して頂いた上に、余分な仕事まで引き受けて下さったCTIの皆様にも改めて感謝申し上げます。

特集：日豪交換研修2008 報告

YPEP2008 日豪交換研修報告

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
関東支店 社会環境事業部 環境グループ
YPEP2008 研修生 森永友貴

1. はじめに

日豪交換研修制度 (Young Professionals Exchange Program 以下、YPEPと示す。)は、1995年に締結された日豪覚書に基づいて翌96年から始まった両国の若手技術者の相互訪問・研修のプログラムである。

本研修の目的は、研修生本人のスキルアップ・視野拡大にあるとともに、派遣・受入両企業においても、研修課程で培われた人脈を維持することにより、将来のビジネスへの発展を念頭においた良好な関係を構築することにある。

本報告は、2008年度の事前研修を含む訪問研修 (訪問先：Sydney 及び Newcastle、訪問期間：平成20年10月7日～25日) の研修報告である。

2. 事前研修

本研修では、相手国への訪問期間だけを研修と捉えるのではなく、訪問前の準備期間に受入会社の担当者との連絡を取り、現地での訪問研修に備えることも研修生の責務となっている。

私は、受入企業の担当者として、お互いの企業の専門分

野等についての情報交換をE-mailにて行うとともに、訪問期間中のスケジュール、宿泊先・ホームステイ先の確認・調整等を行った。

事前研修における情報交換により、現地での時間を滞りなく有効に使うことができた。

また、私の場合、受入企業の担当窓口であったJames Disher氏、ホームステイ先のMark Wilson氏は、昨年度のYPEPで訪日した経緯があり、その経験を生かし、私の研修を実りあるものとするべく、友好的かつ意欲的に、指導・支援して頂いたことも、特筆すべき点である。

3. 訪問研修

3-1. 受入企業の概要

受入先であるCostin Roe Consulting Pty Ltd. は、民間の顧客を主体とし、構造設計(住宅、商業、工場、公共施設等)に加え、Strata Engineering Solutions と称する集合住宅等の維持・補修に係る業務を主に取り扱っているコンサルタント会社である。社員20人程度の小規模の組織ではあるものの、取扱業務は多岐に亘り、個人住宅の構造診断のような小規模な案件から、商業複合施設の設計・監理といった多角的な技術力を要する大規模な案件まで、様々な業務実績を持つ企業である。



受入企業の社員の方々と

3-2. 豪州のコンサルタント技術者の活動

豪州のコンサルタント技術者は、通常業務の他に、自らの職業の地位の向上に資する活動も行っている。豪州では、ACEAが主体となって、大学進学を控えた学生のいる高校等に技術者を派遣し「コンサルティング・エンジニアという職業は何か?」という説明会が実施され

ている。次世代を担う学生の興味を励起するとともに、コンサルタント技術者になるための大学進学への道標を示すことで、同職の地位の向上や能力の底上げに資する取り組みを、長期的な視点で計画的に行なっている。担当のJames Disher氏も、過去に学校説明会に赴いた実績があり、上記の活動がACEAの主導のもと、精力的に推進されていることが窺い知れた。

3-3. ホームステイ

訪問期間中は、長期滞在型のコンドミニアムでの宿泊を基本としたが、10月10日(金)～12日(日)の期間は、受入企業の社員であるMark Wilson氏の自宅にホームステイした。

彼とご家族(夫人と1歳の娘)との共同生活を通じて、オーストラリア特有の文化や生活習慣に触れるとともに、別の視点から日本を見つめ直すことができたことは貴重な経験であった。



ホームステイ先の家族との交流

3-4. ヤングサミット

10月24日(金)、ACEA事務局において、ヤングサミット(研修報告会)が実施された。

報告会では、日本の研修生が、各々の滞在先での研修内容の報告を行った。また、日豪における若手技術者の育成制度の違いなどについて見解を述べると共に、日豪の技術者同士で、意見交換を行った。報告会における英語での発表は、訪問期間中の関係者とのやりとりや、2度にわたる社内プレゼンテーション等を経験したおかげで、落ち着いて実施することができた。



研修報告状況



日豪の技術者たちの再会を祈願して!

4. 日豪における技術者育成制度の違いについて

4-1. 社内活動

社内活動としては、OJTや勉強会等が挙げられるが、上司から部下への指導・教育方法や、定期的に行われる勉強会等については、日豪に大きな違いは見受けられなかった。

4-2. 社外活動

社外活動としては、修士習得や講習会等が挙げられる。修士習得については、豪州では、コンサルタント技術者が就職後に修士を習得するために大学に通う割合が高く、企業の支援体制が日本より進んでいる。講習会については、継続教育の観点からCPD制度があり、日本と共通している一方で、講習会自体のスタイルは大きく異なる。日本では、有識者の話を聞くことだけが目的となっているのに対し、豪州では、有識者の話を聞く

同時に、講習会の前後で、参加した技術者同士で意見交換等を積極的に行い、人脈や見識を広げるための努力を精力的に行っている。日本の技術者も見習うべき点である。

5. おわりに

本研修に参加するにあたり、ご指導・ご支援頂いたAJCE・ACEA両事務局の皆様、豪州での受入企業であるContin Roe Consultingの皆様、快く本研修に送り出して頂いたオリエンタルコンサルタンツの皆様のご厚意に深く感謝申し上げますと共に、家族一同の協力に感謝申し上げます。

今後は、本研修で得た経験や人脈を糧に、コンサルティング・エンジニアの地位と信用の向上と、日豪交流のさらなる発展に努めていく所存である。関係各位に、今後のご指導ご鞭撻をお願いし、本報告を締め括る。

特集：日豪交換研修2008 報告

YPEP2008 研修報告

いであ株式会社 広島支店橋梁グループ
YPEP2008 研修生 石山正人

1. はじめに

2008年10月7日～10月25日の約3週間、「OPUS QANTEC McWILLIAM」の豪州ブリスベン支店にて

訪問研修を行いました。ホスト会社である「OPUS QANTEC McWILLIAM」は、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、カナダに支店をもつ大手コンサルタ

ント会社です。ブリスベン支店の主な業務内容は、建築設計や土木設計で日本のコンサルタントと同じような業務内容であったため、ホスト会社に馴染むのは時間がかかりませんでした。また、オーストラリアに行くのも初めてでしたの大変刺激的な研修でした。

2. 事前研修について

今回は3ヶ月程度前から事前研修ということで、ホスト会社の担当者 Nathan Scott とメールにてお互いの自己紹介、会社概要、研修スケジュールの確認やその他質問事項のやり取りを行いました。その中で、今回研修の議題である「Professional development of engineers」(日本とオーストラリアでの技術者専門分野の育成方法の違い)について研修前段階の議論も行ったため、現地での研修をスムーズに行うことができました。また、事前にメールを交換することで、担当の Nathan Scott と現地であつたとき気兼ねなく交流できたのは嬉しかったです。

3. 訪問研修について

(1) 研修内容

豪州での研修については、①「Blue Card」取得 ②現場視察 ③社内研修 が主と内容となりました。

①「Blue Card」取得については、「Blue Card」とは……クィーンズランド州では建設現場での作業・視察を行う場合、「Blue Card」という資格を取得しなければならず、100問程度からなるテストに合格しなければなりません。当然全ての問題が英語で建設に関する専門用語が多く出てくるため、合格・資格取得までに2日程度時間を

を要しましたが、大変現場作業について勉強になりました。

②現場視察については、マンション、スーパーマーケット、病院、橋梁等さまざまな建設現場の視察をしました。特に建築系の建設現場を視察するのが初めてでしたので、とても新鮮で勉強になりました。また、現場視察ではサンシャインコースト事務所まで出張(ブリスベン事務所から車で2時間程度)し、現場の視察を行いました。

建築では設計から施工管理まで設計会社を実施するため、自分の設計した物件は1週間に1回程度チェックのため現場に行くそうです。日本の土木では施工管理は発注者や別途業務委託がされるため、違うところでは。

③社内研修については、私が日本で橋梁(構造)設計の部署であったため、病院の構造図等から荷重計算を行ったり、また橋梁の設計も行いましたが、日本とオーストラリアとの設計手法の違いに戸惑いました。

(2) 「Professional development of engineers」について

事前研修でも若干議論しましたが、改めて多数の技術者に意見を伺いました。日本とオーストラリアでは基本的な考え方は一緒ですが、違った部分もあり大きな成果が得られたと思います。特にオーストラリアでは設計者の地位が高く、発注者・施工者への発言権が高いのが印象的でした。



マンション建設現場



病院の建設現場にて



職場風景



オーストラリア動物園にて

4. 豪州での生活

■日常生活

ブリスベンの都市は、100万人程度の人口で大きすぎず・小さすぎず生活するには快適な都市でした。また、天気も晴れの日が多く通常25℃と快適だったため、とても生活しやすかったです。また、通勤についてはアパートから会社まで徒歩10分程度で、日本のような通勤ラッシュも経験せず快適な通勤でした。

■職場環境

研修先の「OPUS」では、日本のオフィスとは違いカードキーが無いとオフィスに入れない・エレベーターのボタンが押せない状況で、セキュリティが大変厳重でした。時々10時から(15分間)ティータイムがあり、グループのみんなが集まります。そこで雑談や技術的な議論も行われていたので、報告・連絡・相談もその場ででき、且つコミュニケーションの場となっていたので、とてもよい習慣であると感じました。

また、勤務時間はAM8:30～PM5:00(昼休み1時間)で、基本的にはPM5:00で終業のため殆どの人が6:00には帰宅します。夢のようです。社内環境は電話対応が少なくとも静かで、仕事がしやすい環境だと感じました。

■ホームステイ

今回の研修は基本的には自分のアパートから通勤しましたが、週末やサンシャインコースト事務所に出張の時は、Nathan氏やJason氏宅にホームステイしました。ホームステイでは日本の家よりオーストラリアの家(一戸建て)は、かなり大きくて、すばらしいゲストルームがありました。日本とは違うな……と感じました。訪問したと



ブリスベ市内

きに家族の方も気兼ねなく対応してくださったので、とても感謝しています。

■週末活動等

週末や平日の就業時間外も担当のNathanがいろいろ考えてくださって、ブリスベ市内観光、サッカー観戦、動物園、食事等さまざまにオーストラリアを体験できました。

5. おわりに

今回の研修にあたり、「Professional development of engineers」の議論や日本とオーストラリアの仕事環境、文化、生活習慣の違いを経験でき、大変有意義な研修でした。

また、ホスト会社の担当者のNathanをはじめ、構造グループのMark、Aaron、Jason、「ARUP」のDavid、他たくさんの方にお世話になりました。ありがとうございました。